

—学園都市ひらかた推進協議会設立5周年記念事業—

学園都市ひらかたフォーラム

創造力の原点「学び」の可能性—魅力ある学園都市へ向けて



主催：学園都市ひらかた推進協議会

- 学園都市ひらかた推進協議会設立5周年記念事業 -

学園都市ひらかたフォーラム

創造力の原点「学び」の可能性 - 魅力ある学園都市へ向けて

開催日 平成15年9月27日(土) 午後1時30分～4時

開催場所 大阪歯科大学(楠葉学舎)

プログラム

・基調講演

「教育改革の推進と生涯学習社会の実現について」

文部科学省生涯学習政策局政策課長 布村 幸彦氏

・エキジビション

「和洋の対話 - 現代日本の響き」

笙：橋本 薫明氏 ピアノ：上畑 正和氏

・研究フォーラム

「大学と地域の連携 - 新しいまちの未来へ向けて」

コーディネーター：田中 久和氏(大阪教育大学教授)

パネリスト：金子 敦郎氏(大阪国際大学学長)

木村 磐根氏(大阪工業大学情報科学部長)

上野 武彦氏(関西外国語大学短期大学部教授)

野村 文夫氏(NPO法人NALC枚方・交野

「天の川クラブ」代表、

生きがい創造学園事業受託法人代表)

中司 宏氏(枚方市長、学園都市ひらかた推進協議会会長)

司会：南 亜由美氏(大阪国際大学経営情報学部2回生)

主催 学園都市ひらかた推進協議会

大阪歯科大学・関西医科大学・関西外国語大学・摂南大学(薬学部)・

大阪国際大学・大阪工業大学(情報科学部)・枚方市

後援 枚方市・枚方市教育委員会

協賛 (株)京阪ケーブルテレビジョン・(株)エフエムひらかた

参加者数 約270人

学園都市ひらかたフォーラム

創造力の原点「学び」の可能性 - 魅力ある学園都市へ向けて

司会(南)

皆様、本日はご来場誠にありがとうございます。

大変お待たせいたしました。只今より、学園都市ひらかた推進協議会設立5周年記念事業「学園都市ひらかたフォーラム」を開催いたします。

私は、大阪国際大学経営情報学部2回生の南亜由美と申します。本日は、司会進行という大役を無事務めることができるか不安ではございますが、精いっぱい担当させていただきますので、よろしくお願いいたします。

では初めに、フォーラムの開催に先立ちまして、3人の方々に開会宣言を行っていただきます。

中司宏枚方市長、森裕司枚方市議会議員、そして、本日の会場をご提供いただきました古跡養之眞大阪歯科大学学長です。

では、学園都市ひらかた推進協議会を代表して、中司宏枚方市長よりお願いいたします。

1. 開会宣言



枚方市長(中司宏)

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました枚方市長の中司です。

只今から、「学園都市ひらかたフォーラム」を開催いたします。

皆さんには大変お忙しいところをご参加いただきまして、本当にありがとうございます。また、公務ご多忙の中、基調講演をお引き受けいただきました

文部科学省の生涯学習政策局政策課長の布村様、そして各パネラーの皆さん、また、花を添えていただきましたご来賓各位に心から感謝申し上げます。そして、会場をお借りしています大阪歯科大学様にも感謝申し上げます。

さて、本市では、まちづくりのビジョンとして、市民誰もが生涯を通じて学ぶことができ、またその成果をまちづくりに生かせる生涯学習都市を掲げております。そして、その中で「学園都市ひらかた」を目指して、大学と行政との連携を目指しているところでございます。

今日までの経過や取り組み等につきましては、お配りしています資料に掲載しておりますが、後ほどのパネルディスカッションでまた紹介をさせていただきたいと考えております。

旺盛な学習意欲を持つたくさんの市民の皆さん、そしてそれぞれ特色の異なる六つの大学があるまちは、全国でもそう多く存在するわけではないと思っています。本日のフォーラムを契機に、本市の未来像をさらに豊かに描いていき、そして確かなものにしていきたいと考えております。

どうかよろしくお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。



司会(南)

続きまして、市議会を代表して、森裕司枚方市議会議員よりお願いいたします。

枚方市議会議員(森裕司氏)

皆さんこんにちは。只今ご紹介いただきました市議会議員の森でございます。今日は、市議会を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げます。

学園都市ひらかた推進協議会設立5周年記念事業の「学園都市ひらかたフォーラム」開催、誠にありがとうございます。

今、日本の国は、混迷・混乱・混沌と、いわゆる3混の時代を迎えております。この時代、まだまだ出口は見えません。そのような時代背景のもとに、多くの市町村は、今、元気がなくなっております。この元気を取り戻すのは何か。私は、やはり市民の方一人一人のお力、そして若い力の結集が元気を取り戻すもとだと思っております。

幸いにも、我がまち枚方には六つの大きな大学がございます。平成9年に6大学学長・市長懇談会がスタートされ、そして平成11年に「学園都市ひらかた推進協議会」が設立され、今までに大学と行政が連携して枚方のまちを良くしよう、元気にしよう運動を進めてこられました。この枚方のまちを良くするには、やはり若い方の力が必要でございます。そういった意味で、私は大変高い評価をさせていただいております。

結びに当たりますが、本フォーラムが成功に終わられますように、そして貴協議会が今後ますます発展をされますように、また今日ご参加の皆さん方がますますご健勝、ご多幸であられることを祈念し、誠に簡単措辞ではございますが、挨拶にかえさせていただきます。

今日は、お招きをいただきまして大変にありがとうございました。



司会(南)

では、続きまして、開催会場をご提供いただいております大阪歯科大学、古跡養之眞学長よりお願いいたします。

大阪歯科大学学長(古跡養之眞氏)

皆さんこんにちは。ようこそお運びいただき、誠にありがとうございます。

「学園都市ひらかた」、すばらしい名前です。市長もきつと鼻高々でいらっしゃると思いますので、我々6大学、力を合わせて、市長の鼻を折らないように、今後ますます協力していきたいと思っております。



大阪歯科大学は、今回のフォーラムでは応援団の方に回っておりますが、医歯薬3校の一つとして、医療に関するこのような催しが企画されましたら、出番があらうかと思っております。

ついでに、本学のPRをさせていただきますが、この楠葉学舎では、毎年2月に「大阪歯科大学公開講座」という催しを行っております。先ごろ天満橋学舎の方が終了しましたので、2月から3月にかけての楠葉学舎の公開講座にもぜひともお越しいただきたいと思っております。

それから、間もなく学園祭もございますし、あるいは管弦楽団部の定期演奏会や自主コンサート等で、2階も含めて満員の盛況の行事もございます。いろいろ枚方市の広報を通じてご案内申し上げますので、お運びいただければ、学長としてこれに勝る幸せはございません。

今日は、ご出席の皆様方のご協力で、このフォーラムの実が上がりますことを祈念いたしまして、ご挨拶いたします。

どうもありがとうございます。

司会(南)

皆様、ありがとうございます。

ここで、本日この会場にご来場いただいておりますご来賓の方々を、順不同ではございますが、ご紹介させていただきます。

参議院議員・山下栄一様。

続きまして、参議院議員・中島章夫様。

続きまして、衆議院議員・平野博文様の代理で、福岡隆様。

続きまして、参議院議員・高嶋良充様の代理で、北井亨様です。

続きまして、大阪府教育委員会教育長の竹内脩様です。

どうも、ありがとうございます。

早速ですが、これより、基調講演を行います。

講師には、文部科学省生涯学習政策局政策課課長の布村幸彦様をお迎えいたしております。

布村様は、長年、文部科学省で教育行政に携わっておられまして、学習情報課長、教育助成局視学官(兼)行政改革官、高等教育局医学教育課長、初等中等教育局教育課程課長を経て、平成14年8月より生涯学習政策局政策課長を務めておられます。

本日のテーマは、「教育改革の推進と生涯学習社会の実現について」です。

それでは、布村様、よろしくお願いいたします。

2. 基調講演

「教育改革の推進と 生涯学習社会の実現について」

～はじめに～

文部科学省

生涯学習政策局政策課課長(布村幸彦氏)

皆さんこんにちは。只今ご紹介いただきました文部科学省の生涯学習政策局政策課課長の布村と申します。

本日は、「学園都市ひらかたフォーラム」の基調

講演という大役をいただきまして、誠にありがとうございます。また、日頃から枚方市におかれましては、中司市長さんをはじめ、市の方々によりまして、「学園都市ひらかた」という形で、六つの大学を中心として、生涯学習都市を大きく発展させていただいております。本当に力強い全国へのご発信に、心から敬意を表したいと思います。

今、生涯学習につきましては、大学との連携というのが一つ大きな課題だと思っております。また、本日パネリストにもNPOの方にご参画いただいておりますけれども、学校ともども開かれた生涯学習社会を形成していく上でも、NPOの方、民間教育事業の方々の幅広いご参画をいただくというのが今後の大きな課題だと思っております。今、この資料で枚方市の活動状況を拝見しております。生涯学習のまちづくりの最先端をいっていらっしゃるということを、今日の機会に学ばさせていただきましたので、広く全国にご紹介をさせていただきたいと思った次第であります。

今日は講演として、「教育改革の推進と生涯学習社会の実現について」という題を掲げさせていただきます。前半の教育改革の推進につきましては、私どもが担当しておりますが、この3月に中央教育審議会という文部科学省の組織から提言をいただきました教育基本法の改正、それから教育振興基本計画の策定についてご紹介をさせていただきます。そして、後半の方では、幾つか資料をご用意させていただきましたが、生涯学習の社会づくりに向けて、国としてどんな取り組みをしているのかご紹介をさせていただきますと思います。

そういう中で、実践としては、枚方市の方々の方がより進んでいらっしゃいますので、パネルディスカッションで、いろんな課題をどんどん提起いただけるものと思います。基調講演の中では、理念的なところをご紹介させていただき、多少でも取り組みの参考にしていただける点があれば幸いです。

この教育改革の推進につきましても、ご来賓の山下栄一先生、中島章夫先生はじめ、教育に非常に造詣の深い方々がいらっしゃいます。特に、山下先生、

中島先生は文教関係に非常にお詳しく、中島先生は文部科学省の先輩でもありますので、こういう場で皆様方にお話するのは非常に緊張を伴います。多少お聞き苦しい点はあろうかと思いますが、40分いただきましたので、その中で一生懸命ご説明をさせていただきたいと思います。

先ほど、パネラーの方々と雑談をしている中でも、関西地区ですので、阪神タイガースのお祝いを、まずしておかないとよくないのかなということで、阪神タイガースの18年ぶりの優勝に心からお祝いを申し上げたいと思います。

私は富山県出身で、富山というところは正力松太郎さんの生誕地ですので、そういう縁から巨人ファンをやっております。残念ながら、巨人は監督の騒動中で、文部科学省に入ったときも江川騒動で国会答弁を書かされて、「江川問題が青少年に与える影響は」という大臣答弁を書いたのが仕事のスタートだったような時代でした。それでもやはり、巨人ファンは続いておりますが、そういうことは置かせていただきます。

それでは、「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」という冊子のご説明から入らせていただきたいと思います。

～新しい時代にふさわしい教育基本法と

教育振興基本計画の在り方について ～

非常に中身の多い答申ですので、生涯学習という切り口から、この答申の趣旨をご説明させていただければと思います。

答申自体は、薄緑色の冊子が本体になっていますので、また、時間が許す限り中身をお目通しいただければ幸いです。

薄い冊子の方は、全体でページ数が1ページから6ページまで番号が振ってございます。答申として、全体で第3章構成になっておりまして、1ページ目が第1章に相当する部分でございます。そして、2ページから5ページまでが第2章、6ページ目が第

3章と、全体で3章構成になっています。

そして最初に、1ページ目をご覧いただきたいと思います。ここでは第1章として、「教育の課題と今後の教育の基本的方向について」ということで、今後50年・100年後、我が国の社会はどうなるのであろうか、またそれを支える教育としては、どうあるべきかというような形で、大きな教育の目標を掲げております。

真ん中に、「これからの教育は、21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成」という大きな目標が掲げられています。そして、この大目標の下に五つの丸がございますが、これが五つの目標として掲げていただいたものになります。

これも、ざっとご覧いただきますと、教育の機能としては、一人一人の人間の育成という面と、国家社会の形成者という面の両面があります。下の三つは、どちらかといいますと個人の育成、人間の育成という観点から、掲げた目標でございます。「自己実現」というキーワード、それから「豊かな心と健やかな体」というキーワード、それから「知」の世紀をリードする創造性に富んだ人間の育成、こちらは大学教育も含めた形ですが、「創造性」ということがキーワードになっております。

上の二つは、どちらかというとな国家社会の形成者、そういった観点から教育の目標を掲げていただいております。キーワードとしてまず、「新しい『公共』」という概念を掲げていただきました。これも、「新しい『公共』」というのは、国家社会ということで変わらないわけではありますが、「新しい」という言葉のイメージとしては、できるだけ主体的に参画する、問題解決に積極的に取り組むと、そういう一人一人の国民が、国家社会の問題に主体的に参画する、そういう社会を「新しい『公共』」と呼んでいこうと、そういう趣旨で「新しい『公共』」という言葉が生まれてきておりました。

そして、右側の方には伝統・文化、郷土や国を愛する心という事柄が掲げられておりますけれども、こちらも国際社会の中の日本人と、そういう位置づけの中で、自らの足元の伝統・文化というものをしっかり理解し、発展させていこうという観点から目

標が掲げられております。

したがいまして、「教育の目標」も、個と公のバランスをしっかりとりながら構成していくという議論で、まず1ページ目が成り立っています。



そして、この「教育の目標」を実現する上で、教育の根本法であり、教育の理念や原則を定めております「教育基本法」につきまして、2ページから5ページにかけて議論が展開されています。

先ほど申し上げた目標を実現する上で、教育の理念・原則はどうあったらいいのかをここで論じ、そして6ページ目に「教育振興基本計画」というものを掲げています。目標を実現する上での一つの柱として、理念・原則はどうあるべきか、また施策の体系化を図る計画を策定してはどうかということです。そういう理念の側面と施策の側面の両面を通して、21世紀の教育改革を実効性あるものにしていくという構成になっています。

そして、本日は少し、2ページ目以降の教育基本法の改正につきましてふれさせていただきます。新聞報道等によりますと、「愛国心」あるいは「新しい公共」など、人間の内面にかかわる事柄を、法律で強制するものではないかというようなご心配の向きもございますけれども、答申自体は、非常に幅広く多面的な提言がなされていますので、そこを学校教育・生涯学習を中心にご紹介をさせていただきたいと思えます。

最初に、2ページ目をご覧いただきたいと思えます。教育基本法自体は、昭和22年3月に制定され、非常に簡潔に日本の教育の目的・方針をうたった法律であり、これに基づいて戦後教育が展開されてき

たという位置づけであるご理解いただければと思います。

そして、今回の答申におきましては、今の教育基本法は前提として大事にしながら、今後の50年後・100年後の教育の在り方を考えたときに、どのような教育の理念・原則を新たにより明確にしていっていいのか、そういう観点からご議論をいただいておりますので、現行の教育基本法を改悪、あるいは否定するという趣旨ではないということ、まずご理解をいただければと思います。

そして、2ページ目の黄色い枠で囲んだ～が、法律を改正する視点として掲げられています。その中で、一つ目は、信頼される学校教育の確立です。これは後ほどご説明をさせていただきますが、4ページ目の第6条に学校教育に関する条文がございます。そこではっきり、学校の役割を明確に書き加えていってはどうかというのが掲げられています。

それから二つ目に、「知」の世紀をリードする大学改革の推進という理念が掲げられておりますが、この法律は昭和22年の制定ですので、余り明確には大学・大学院について触れていません。しかしながら、今後の21世紀の教育を考えると、生涯学習という観点からも、大学の果たす役割は大きいものがあるということ、大学を明確に位置づけるというのも改正の視点に掲げられています。

それから三つ目には、家庭の教育力ということが掲げられております。これも5ページ目に、右肩の方に触れておりますが、現在の条文では、社会教育という第七条の規定の中に、一つの領域として家庭教育が位置づけられております。教育の原点は家庭である、あるいは教育の出発点は家庭にある、人生最初の教師は親である、そういう認識のもとに、家庭の教育力をしっかり高めていくという観点を新たに条文として起こしてはどうかというのが視点になっています。

四つ目としては、「公共」に主体的に参画する意識・態度。

五つ目として、伝統・文化の尊重、郷土や国を愛する心と国際社会の一員としての意識の涵養。ということは、先ほどの目標と同様に、個と公の balan

ス、あるいは国際社会の中の日本という位置づけのバランスをとりながら、改正の理念として打ち立てられたものであります。

それから六つ目に、生涯学習社会の実現ということが掲げられています。こちらでは、また後ほど冊子の本体をご覧いただければと思いますが、生涯学習の理念というものをしっかり、今後の教育の理念・原則として明確に位置づけていくことが必要ではないかとしております。

～生涯学習の理念～

本体の11ページから12ページのところを少し紹介させていただきますと、「今日、社会が複雑化し、また社会構造も大きく変化し続けている中で、年齢や性別を問わず、一人一人が社会の様々な分野で生き生きと活躍していくために、家庭教育、学校教育、社会教育を通じて職業生活に必要な新たな知識・技能を身に付けたり、あるいは社会参加に必要な学習を行うなど、生涯にわたって学習に取り組むことが不可欠となっている」というように今の状況をまず説明しています。その中でも、教養としての生涯学習という面以上に、職業生活に必要な知識・技能を身につけたり、あるいは社会参加に必要な学習を行うなど、そういう観点から、生涯学習の重要性をうたっています。

その上で、「教育制度や教育政策を検討する際には、これまで以上に学習する側の人々に立った視点を重視することが必要である」ということを強く訴えています。そして、「今後、誰もが生涯のいつでも、どこでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができるような社会を実現するため、生涯学習の理念がますます重要となる」と、そのような本文になっておりまして、そういう観点から生涯学習の理念がとらえられています。

繰り返しになりますが、教養ということ以上に生涯学習が広がっていった、職業生活に必要な知識・技能を身につける、あるいは社会参画に必要な学習を行うという視点も大切にしてほしいということや、また、いつでも、どこでも、誰でも自由に学ぶことができたり、議論がありました、学んだ成果を適

切に評価されるということが大事であろうということがうたわれています。

後ほど少しご紹介させていただきたいと思いますが、生涯学習を担当する審議会の方でも、この教育基本法の議論も踏まえながら、今後の生涯学習・社会教育はどうあったらいいのか議論を進めているところでもあります。

その中で、この前たまたま出身地である富山市の「インターネット市民塾」という組織に、ヒヤリングをさせていただきました。「インターネット市民塾」というところでは、インターネットの上で一人一人の市民の方々が参加費を払う形で参加し、自分で学びたい事柄を選んで、それを自由にインターネット上で、自分の好きな時間に学習することができるというシステムが立ち上がっています。そして、その生涯学習市民塾の中で学んだ事柄、あるいは自分で普段から学んできた事柄を、逆に今度は教える側に回るということもスムーズにしているそうです。そういう双方向性が非常に有効に働いているので、一生懸命学んで、それを評価されて自分で生かす場が提供されているといったことをキーワードとして、非常に広がりを持ってきたということです。

自分で一生懸命学んだところを、今度は自分が教える側になるわけです。ただ、教える側になりますと、一定の受講生を集めないと、すぐに閉じなくてはいけないという厳しい評価の中にさらされているようでもありますけれども、生涯学習で学んだことを生かす場が提供されていることが非常にスムーズにしている例だと思っております。このように、いつでも、どこでも、誰でも学ぶことができる、そしてまた、それを適切に評価されて活用でき、生かす場が設けられるというような社会も、生涯学習のあり方として目指すべきところであり、参考になった事例です。

～新しい時代にふさわしい教育基本法と

教育振興基本計画の在り方について ～

また、この2ページ目に戻らせていただきますけ

れども、この教育振興基本計画の策定等、七つの柱で教育基本法を見直していったらどうかという提案があったところです。

具体的には、少し条文でご説明をさせていただきたいと思いますので、3ページ目以降をご覧ください。先ほどの法律全体の見直しの視点が2ページ目にあって、それを「具体的に条文では」というのが3から5ページになります。その中でも、一条・二条、3ページ目の真ん中あたりで、「教育の目的」、「教育の方針」が現在定められております。

申し遅れましたが、この左の方の緑色系の部分が現在の条文で、右側のオレンジ色形のところが答申で出された改正の方向と見ていただければと思います。

3ページ目の右側のところで、「教育の目的」として第一条、あるいは第二条の「教育の方針」に新たに規定してほしい理念として、八つの事柄がそこに掲げられています。

その中の下から四つ目のところでは、生涯学習の理念というのを掲げており、教育基本法の中に明確に位置づけていったらどうかということでもあります。

それから一つ飛んで、職業生活等の関連の明確化ということも位置づけられています。

先ほど、生涯学習の理念の中でも、職業生活に必要な新たな知識・技能を身につけるという機能が重要視されておりますが、学校教育も含めて、今後、職業生活等の関連の明確化というものは、かなり強く意識されています。

このようなことを教育の基本理念として位置づけながら、具体の条文では、4ページ目に、第六条「学校教育」という規定がございます。現在の条文では、「法律に定める学校は、公の性質をもつ」ということしか触れていませんけれども、生涯学習社会の中で、学校教育がどういう役割を持って、どこまで責任を負うのか、法律上も明確に規定してはどうかという議論になりました。「公の性質」という抽象的な事柄ではなくて、学校の基本的な役割について、右側に「知・徳・体の調和のとれた教育を行

うなど」と、この「など」で省略していますが、実際は、この「知育・徳育・体育の調和のとれた教育」あるいは「豊かな感性を育む」という教育、それとともに、生涯学習の理念の実現に寄与するという観点から、学校の役割を簡潔に規定していったらどうかということです。学校の役割を明確に規定することによって、学校が果たすべき役割はどこにあるのか、世の中の方々にも明確にお伝えをし、そこを学校の方ではしっかり踏まえて、役割を果たしていく。そういう法律の体系にしていきたいという議論になっています。

その学校の役割を簡潔に書く中でも、「生涯学習の理念の実現に寄与する」という観点も明確に考えていこうというのが、今回の改正の方向として一つ出されています。

それと、「そのときには」ということで書いていますが、大学・大学院の役割というものも今後重要な課題になります。これまで十分触れられず、踏み込まれていなかった大学の役割も、あわせて書き加えていこうということで、本文の方では、「高度で専門的な知識を備えた人材の育成を図る」こと、「真理の探究を通じて、新たな知見を生み出す」こと、これらを通じて、「文芸学術の進展、社会の発展に貢献すること」というような形になっております。

それと、私立学校につきましても、現在の教育基本法上は明確な位置づけがなかったということから、私立学校の役割の重要性も踏まえて、学校の役割を書いていこうということが、一つの方向性として打ち出されています。

それから、先ほど少し触れさせていただきましたが、第七条に社会教育に関する規定がございます。現行の条文では、「家庭教育及び勤労の場所その他社会において行われる教育は」ということで、家庭教育それから社会教育も一つの条文として位置づけられています。

繰り返しになりますが、5ページ目の右上にありますように、家庭教育につきましても、「教育の原点である」ということから、ここも学校と同様に、家庭の役割というものをしっかり位置づけていくこ

とが議論されました。

家庭の役割をまずどう書いていくか。ここのパンフレットの方では十分に触れられていませんが、教育基本法という法律に、各家庭教育の役割として、まず一つは、「子供たちに基本的な生活習慣を身につけさせること」、それから「豊かな情操をはぐくむこと」などという形で、家庭教育としての役割を書き加えていこうとしております。

この議論がありましたときに、学校の役割をここまで明確に位置づけているのだから、家庭の役割も位置づけていこうとしたわけです。そして、地域社会の役割、地域の教育力が下がったということで、地域社会の役割をどう書くべきかという議論にもなりました。学校の場合には、教職員という受け手の方々がいらっしゃるし、家庭の場合には、保護者という方々に向けてのメッセージとして伝えられるけれども、地域社会の教育力といったときに、誰に対するメッセージになるのかという議論がまだ十分にはされておられません。誰に向けて法律を変えていったらいいのか、最終的には判断できず、地域社会についての教育の上での役割は書くことができなかったというのが現状です。



本日のように、枚方市さんの場合であれば、「学園都市ひらかた」という位置づけで、例えば市長さんと6大学との推進協議会というように、明確な地域教育の主体がはっきりしていれば、そういう方々に向けて地域社会における教育の役割を書けるのでしようけれども、今の段階では、法律レベルではそこまではいけておらず、最終的には学校・家庭・地域社会の連携・協力をうたっていこうとしております。そういった中で、学校教育も開かれたものとして、家庭・地域と連携しながら、全体として教育を

進めていくというのが、学校・家庭・地域社会の連携・協力という理念として、これも新たな法律として書いていこうという形で議論が集約されたところ です。

今、学校教育・社会教育のところを中心にご説明をいたしましたけれども、このような形で、それぞれの役割を明確にしていきながら、法律上、これまで明確になっていなかったものを明確にして、そこを踏まえていただいて、各学校それから各家庭においても教育に取り組んでいただければというメッセージとして、この教育基本法が機能を果たせればという趣旨で書かれているところでございます。

そういうメッセージという側面を持ちつつ、あとは6ページ目の「教育振興基本計画」というものを通じて、具体的な施策を国として何に取り組んでいくのかをご紹介しながら、国民の方々に理念としてのメッセージと具体の施策を示していけたらと思っています。計画では、できるだけわかりやすい目標できたら数字による数量的な目標を掲げて、5年間でここまで達成しますというような形で国民の方々に伝えをし、5年後には、文部科学省として、あるいは都道府県と連携して、どこまで到達することができたのかしっかり評価して、それをまた批判にさらさせていただくというものです。そういうような計画を新たに作っていこうというのが、今回の答申の基本的な考え方でございます。

ちょうどこれから選挙があり、各政党の方々にいかれましても、マニフェストという形で、できるだけわかりやすい政策を国民の方々に提示し、判断を仰ぐという手法が、これからどんどん定着していきんだらうと思います。

教育の上においても、今までは教員の分野、学校施設の耐震化・老朽化対策という個別の分野ごとの計画でしたが、教育全般を通じた計画を立てて、政府全体で、もとより閣議決定を通じて、国民の方々に責任を持って明確に示し、国として取り組む計画というものを策定していったらどうかというのが、この答申の趣旨であります。

こういう形で、中央教育審議会に3月に答申を出していただきました。生涯学習あるいは家庭教育を大事にしようと、そういう視点からの答申であるということも、是非ご理解をいただきたいと思います。

この教育基本法の改正につきましては、答申を踏まえて、本来であれば、文部科学省におきまして改正案というものをお示しして、またご議論いただく準備もしなければいけないところではありますが、重要な法律ということで今、与党政治の場でご議論をいただいているところでございます。それを踏まえまして、いずれしっかりと改正に取り組んでいかなければいけない課題というふうに今、位置づけられているところです。

そして、私ども生涯学習政策局と名を打っておりまして、政策という分野は、今、教育改革の推進というテーマで半分話させていただきましたので、残り少し、生涯学習の推進、生涯学習社会づくりに向けて、どのような取り組みをしているのか、これも一端になりますが、ご紹介をさせていただきたいと思います。

この黄色い、「あなたのまちの生涯学習まちづくりを応援します」というパンフレットをご覧くださいければと思います。

～あなたのまちの

生涯学習まちづくりを応援します～

開いていただきますと、最初に「生涯学習まちづくりの実現に向けて」という表題のもとに、全国の市町村で生涯学習都市宣言などをしていただいている市町村の状況をご紹介させていただいています。

このページの右下の方に、全国生涯学習市町村協議会事務局ということで、静岡県掛川市におきまして、全国生涯学習都市宣言などをされている市町村の連絡協議会という場を設定していただいています。枚方市も、主要なメンバーとしてご活躍をいただいておりますけれども、全国で今、200を超える市町村が、生涯学習というものを核としてまちづくりを進めていこうという取り組みをしていただいております。この「学園都市ひらかた」も一つの大

きな柱として、この協議会の中で位置づけされているところがございます。

私どもも、そういう各市町村の取り組みを、今手元には持ってきてございませんが、ちょうど1,000ページぐらいの事例集をつくらせていただきました。それぞれの市町村において生涯学習を掲げていただいて、大学あるいは多様な機関等の連携のもとに、どんな特色ある取り組みをされているのかというのを紹介した事例集もつくっていますので、また機会があればご覧いただきたいと思います。

それから、真ん中の？マークのところ「生涯学習まちづくりを推進する上で、具体的な支援策はあるのでしょうか？」ということですが、今、私どもが行っているところでは、平成14年度より「生涯学習まちづくりモデル支援事業」を実施させていただいています。これはまだ始めて2年目ですが、枚方市さんでは、既にこの推進協議会は5年目を迎えていらっしゃると思いますので、枚方市さんのことも参考にさせていただいて、この赤い雲みたいなところの下に書いていますけれども、市町村のまちづくりを推進する団体の方々に委嘱事業、モデル事業として実施していただくことに取り組んでいます。その事業のキーワードとしては、「大学等の有する人的・物的・知的資源を最大限活用しながら、学習成果に基づく地域住民の能力を生かしたまちづくりを推進する市町村の団体を公募させていただいた上で支援をしていこう」ということであります。

平成14年度には31の市町村、そして今年度は20という形で支援をさせていただいております。

ここに掲げておりますのは、静岡県の掛川市という例では、地元にあります常葉学園大学・静岡大学・静岡県立大学・静岡英和学院大学と連携しながら、協議会という組織は「地球掛川学研究所」という形で、いわゆる地域学・環境学ということを中心に、大学との連携のもとで生涯学習の事業を展開していただいております。

そこでは、ファーストフードに対応するスローフードという趣旨から、スローライフシティという看板を掲げられて取り組んでいらっしゃるという例が

ございます。

それから、滋賀県の山東町というところでは、「さんとう柏原活性丸本舗」というネーミングのもとに、自然環境と生活文化を大事にしながら、大学と連携をして、「水にやさしく光まうまち美しい山東」の実現を目指しています。地域にふさわしい薬・薬学という地元の伝統的な産業の「薬草マイスター」として認証する事業ですとか、何か非常に読みにくくなってきていますが、「あ～ちいぢい塾」という形で、ここも薬草をキーワードとした学び合う場所を作ったり、CMソングをつくったりしています。まちづくりに地元のよさ、特色を生かす形で展開する中で、大学の持っている人的・知的・物的資源を生かしていこうというもので、そういうまちづくりに取り組んでいらっしゃる例を支援しているというのがこの事業です。こちらも昨年から31地域では、成果が上がってきておりますので、これからどんどん紹介させていただこうと思っています。これらの事例は、文部科学省のホームページにも紹介させていただいております。

もう一つ右のページで「マナビィ」という、これもPRになって恐縮でございますけれども、こういう月刊誌で、生涯学習の総合雑誌を毎月1回発行させていただいております。

これは、できるだけ市町村のいい実践事例をたくさん紹介させていただいているもので、今年の6月号は、表紙が高木沙耶さんと、「マナビスト」という生涯学習に熱心に取り組んでいらっしゃる方のインタビューを、カラーページで真ん中に載せています。前のページでは、地元学びのまち大阪府枚方市を紹介させていただきました。ちょうどこの3月に、新たに生涯学習を推進するための基本方針と、それから重要な点、施策等を示した生涯学習ビジョンを策定された枚方市の取り組みを紹介させていただいております。

そういう全国の先進的な事例もたくさん紹介させていただいております。月刊誌でありますので、まだまだ余部がたくさんありますので、是非いろんな機会に手に取っていただければ幸いです。

こういう形で、生涯学習の市町村の取り組みをできるだけ支援をさせていただこうと、進めているところでございます。

～子どもの居場所づくり新プラン～

それと、少し観点が変わるかもしれませんが、「子どもの居場所づくり新プラン」というチラシをご参照いただきたいと思います。

先ほど、枚方市さんの方からお配りいただいた資料の10ページに、「ふれ愛・フリー・スクエアにおける学生ボランティアの参加」がご紹介されていたと思います。この「子どもの居場所づくり新プラン」も、学校5日制が進んで、特に今年度に入って、長崎県の事例、沖縄県の事例、それから東京でも小学校の女の子たちが監禁されたというような事例があって、子供たちが放課後あるいは土曜日・日曜日に居場所がないのではないかと、そういう発想から、来年度の予算要求で取り組もうとしているものです。

これまで、ご紹介した生涯学習の事業は、いずれもモデル事業として取り組んできたものでしたが、今回の「子どもの居場所づくり新プラン」は、地域の大人の方々の力を結集させていただいて、全国展開をしようという発想で取り組むものです。

この1ページ目にありますが、子どもたちの居場所は、もとより家庭が原点ですから、放課後あるいは土曜日・日曜日、保護者がいらっしゃるご家庭であれば、そこが子どもたちの居場所になるように、家庭教育の支援とかアドバイスを、国として積極的に取り組んでいこうというものです。この「家庭」という枠の、右側の「地域」というところの真ん中の「地域子ども教室推進事業」が新規事業です。

それ以外にも、学校の部活動というものも、中学生になる子どもたちのかなりいい居場所になっています。本来、部活動は社会教育にゆだねるという側面もございますが、今の段階では、学校の部活動を推進していくことも、子どもたちの居場所の一つの大きな役割を果たしていただけないかと思っています。

それから、「総合型地域スポーツクラブの推進」というものや「伝統文化こども教室活動」という事業も取り組ませていただいております。そして企業の方々の連携もいただきながら、「地域子ども教室推進事業」を来年度大きく展開していこうと思っています。

2枚目に、その「地域子ども教室推進事業」の内容をお示ししていますが、もともと右肩の方に「緊急3カ年計画」で来年度は125億円の要求をしていこうという予定で、全国小学校が2万3,000校ほどありますが、できるだけ3年間ですべての小学校区ぐらいで子どもたちの居場所がつかれるようにしていこうという趣旨の取り組みでございます。

これは、地域の大人の方々、特にこの枚方のように学生の方々がボランティアとして参加していただければ、小・中学生の身近なお兄さん・お姉さんとして指導者になっていただけたらと思います。あるいは高齢者の方々などの幅広いご協力をいただきながら、放課後子どもたちがそこに行けば、誰かいてくれる、友達がいる、遊べる、スポーツができる、文化活動ができる、あるいは地域のお年寄りの方々から地域に伝わるお話を聞けたり、地域の伝統・文化というものを受け継ぐ場になると、そういう居場所を全国展開したいという事業でございます。

これは口頭で言うと非常にすつと書いてしまっても、これまで学校の開放というものもいろんな支障があり、なかなか難しい中で、学校週5日制のもとで、全国、大阪市をはじめ都会部の川崎市でありますとか、多くの地域で今、いい実践例がどんどん積み上がってきています。枚方市の「ふれ愛・フリー・スクエア」というものも、その一つの大きな実践例だと思います。そういう実践例を、これからどんどん集めさせていただいて、来年度以降7,000校、2年目には1万4,000校という規模で、全国にそういう場をつくっていこうとしております。（査定後、数値変更）一生懸命汗をかいて旗を振りながら、文部科学省として取り組んでいかなければ、空回りしてしまいそうな予算額でもありますので、目いっぱい市町村の方々、都道府県の

方々と連携を図りながら、取り組んでいきたい事業としてご紹介させていただきました。こういった例を、これからいろんな市の方々に、実際どういう方法でやれば有効に機能するのか、長続きするのか、ノウハウもいただきながら全国展開を図っていきたいと思っております。

これらを通じて、子どもたちが自分の居場所というものを、家庭あるいは地域に持つことができれば、精神的にも安定し、いろんな人間的な成長の面として、少しでも有効活用をしていただける場所になるのではと考えています。全国展開ということで大きな課題ではありますが、しっかりと位置づくように、取り組んでいく課題としてご紹介をさせていただきます。これも実際は、市町村レベルで、よりいい実践例がどんどん出ています。先ほども紹介しましたように、事例集も作成しておりますので、是非ご参考にしていただきたいと思います。

～生涯学習分科会～

今、国の施策取り組み状況ということで、幾つかのPRをさせていただきましたが、もう一つ、中央教育審議会の中にある生涯学習分科会という組織を紹介したいと思います。そこでは、新しい時代、この21世紀において、どのような生涯学習社会をつくっていったらいいのか、あるいはまた、「社会教育法」という法律が昭和23・24年に制定されて以来、50年間、博物館あるいは図書館、公民館という拠点施設を中心に、それぞれ司書の方とか学芸員の方などを専門的な人として配置し、社会教育の拠点として活動してきていただきました。これを今後、どういう形で目指していったらいいのか、少し根本的な議論を積み上げいこうということで、この7月から生涯学習分科会が動き出したところでございます。そういった中で、どのような問題意識を持って議論をしているのか、その一端をご紹介させていただきます。

議論のスタートでは、今後、生涯学習を担当する行政の立場から、幾つかの課題をまず出していただきました。6点ほど課題が挙がっていましたが、一

つは、行政に携わる者自体に、生涯学習ということと社会教育ということの混同が見られる。生涯学習という発想に立っているけれども、従前の社会教育・学校教育の枠から抜け切れないで、何となく生涯学習推進に携わり、あるいはまだ制度として社会教育委員という方もいらっしゃるし、その辺の整合性がとれていないのか、行政で混乱があったり、特に市町村の段階では、余計に難しい課題があると伺っています。

それから二つ目には、学校教育と社会教育の連携が未だ十分ではありません。先ほど教育基本法の中でも、学校・家庭・地域の連携というのを理念として掲げていこうということをご紹介させていただきましたけれども、最近では、学校の評価の問題として、自己点検・自己評価をして、それを地域の方、保護者の方々に公表していこうですとか、あるいは学校評議員という仕組みを通じて、校長先生に学校の在り方、運営の在り方についてアドバイスをいただくとか、学校としても開かれた学校を目指そうと動き出しています。そういう地域の方々とつながりを増やす中で、社会教育という機能と、学校教育をどう連携させていくのか、実際のところ十分機能していないのではないかと思います。

大学につきましても、先ほどパネラーの方々とお話をしております、これから18歳人口が大きく減少する中で、社会人の方々の再教育の場、あるいは自らの社会参加のための学習の場として、大学が重要な役割を果たすことが求められていくし、大学の進学率も5割を超えていますので、むしろそういう機能が大学院により強く求められていくと考えられています。

大学院については、修士2年、博士3年という固定的な制度ではなくて、それを1年で圧縮して学位が取れる、あるいは長期にわたって三、四年かけて学位を取れる仕組みなど、社会人の方々が学びやすい制度が積み上がってきています。

学校が、これから開かれた存在になり、あるいは社会人を受け入れるという中で、生涯学習・社会教育を担当する行政として、どのような連携を図っていったらいいのかというのが一つの課題として提起

されておりました。

学習者の方々のニーズが多様化していく中で、学習情報の提供や相談体制の充実が必要であり、そういう視点が大事なのではないかと思います。

4点目としては、NPO、地域における民間教育事業者の教育力の一層の活用が必要です。NPOの方々は、実に多様な人が集まられて非常に大きな力を持っていらっしゃるし、苦勞されて自前で財政的な裏づけも持たれて、一人一人が持っていらっしゃる力を、社会のために役に立てようと、そういう動きがどんどん広がっているの、そういう方々とどう連携していったらいいのか、大きな課題として挙がっていました。



5点目としては、技術革新の進展、産業構造の変化に伴って、大学における社会人の学習ニーズに十分対応した講座の充実が必要ではないかということです。

それからもう一つは、国・都道府県・市町村それぞれがどのように役割分担をしていったらいいのかというのが課題として浮かび上がってきました。

このような課題を踏まえて、今まだフリートーキングの段階ではありますけれども、今後の生涯学習を考えるに当たって、どうしていったらいいのか、どのような意見が出されているのかを少しご紹介をさせていただきたいと思います。

特に生涯学習につきましては、個人の能力の向上という面につながるという点がありますが、よりインパクトの強いメッセージを出せないのかというようなことが言われておりました。

生涯学んでいけば非常にいいことがある。例えば、お金がもうかると、それぐらいでもいいから、生涯学習というものには、インパクトがあるということ

を一生懸命社会に訴えかけていったいいのではないかと考えております。それから、学習成果の活用、評価の仕組みをどんどんつくり上げていく、それから、財政的な側面でも受益者負担ということをおそれずにはっきり出していったらいいのではないかとというような事柄を、今、生涯学習分科会というところでは議論を重ねているところでございます。

～おわりに～

以上で、教育改革の推進と生涯学習社会の構築という観点からの、国の取り組み状況のご紹介を終えさせていただきます。

このような貴重なお時間をいただきまして、誠にありがとうございました。

司会(南)

大変勉強になるご講演、ありがとうございました。

もう一度、布村様に盛大な拍手をお願いいたします。

では、ここで、エキジビションの準備のため、5分間の休憩といたします。

(休 憩)

司会(南)

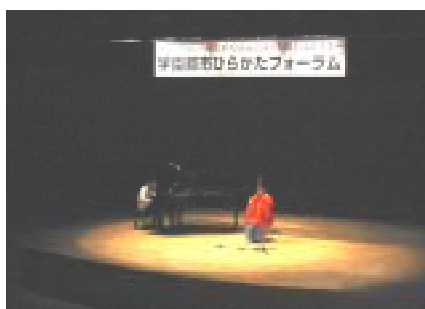
只今より、エキジビション「和洋の対話・現代日本の響き」を始めさせていただきます。

「鳳笙の天上の声」と「ピアノによるハーモニー」、二つの響きが融合する新しい音楽世界をお楽しみいただきます。

演奏は、上畑正和さん、橋本薫明さんのお二人です。では、どうぞ。

3. エキジビション

「和洋の対話 現代日本の響き」



橋本薫明氏

只今演奏しましたのは、笙では古典の「越天楽」という曲です。それに、即興演奏にて上畑さんにピアノで自由な発想で音をつけていただきました。雅楽の「越天楽」とはまるっきり違うものですが、ベースが「越天楽」というものです。

雅楽のリズムは、洋楽と違いまして独特の「間」というのがあります。手を「ウンジャ」と次につけるときの、ちょっとしたタメがあるんですけれども、洋楽にはそれが無いので、上畑さんも随分苦労されて音をつけていただきましたけれども、逆に我々が洋楽の譜面どおりにやれと言われても、なかなか手がそのようについていかないわけで、非常に難しいんです。でももう何年も前から上畑さんと、オルガンですとか、ピアノですとか、あと琵琶の奏者も入りまして、古典と現代楽器の自由な発想での音づくりや即興によるコラボレーションを楽しんでいます。本日も、こうして皆さんに聞いていただけるのは幸いです。

2曲目は、笙の古典で「調子」という曲があるんですけれども、今日は調子がいいとか悪いとか、調子が出るとかというもとになった曲があるんです。その「調子」という曲が出なければ、舞人が舞台上上がることができませんので、舞人が袖で「ああ、どうしたんだろう、まだ調子が出ないのか」と、それが調子が出る、出ないということの起源になったわけです。調子にも6曲ございまして、きょうは「平調の調子」という曲をやります。これは笙では「合竹」といって、今、六つの音がずっと連続して鳴りながら進んでいったような六つの音の連続と、単音、「一竹」というんですけれども、単音の連なりと組み合わせた、昔で言えば、メロディーラインのようなものだったのかもしれないけれども、その平安貴族が楽しんだ「平調の調子」と、上畑さんのピアノがどういうふう絡んでいくか、お楽しみいただきたいと思います。

橋本薫明氏

只今が「平調の調子」という曲でした。

まだ出だして、20分ぐらいではなく、1時間も2時間も吹いていたいんですけども、時間の制約がございますので、今日は2曲だけにとどめておきます。

どうもありがとうございました。

司会(南)

和と洋の融合、大変すばらしいハーモニーをどうもありがとうございました。

もう一度、お二人に盛大な拍手をお願いいたします。

では、ここで、研究フォーラムの準備のため、5分間の休憩といたします。

(休 憩)

司会(南)

大変お待たせいたしました。只今より、研究フォーラム「大学と地域の連携 新しいまちの未来へ向けて」を始めさせていただきます。

はじめに、コーディネーターとパネリストの皆様をご紹介させていただきます。

本日のコーディネーターで、大阪教育大学教授の田中久和様です。

本日のパネリストの皆様です。

大阪国際大学学長の金子敦郎様です。

続きまして、大阪工業大学情報科学部長の木村磐根様です。

続きまして、関西外国語大学短期大学部教授で、枚方市図書館運営委員協議会会長、枚方市社会教育委員の上野武彦様です。

続きまして、NPO法人NALC枚方・交野「天の川クラブ」の代表で、生きがい創造学園事業受託法人代表の野村文夫様です。

そして、学園都市ひらかた推進協議会会長の中司宏枚方市長です。

本日のフォーラムでは、地域連携の現状や、課題の検討、そして今後の展望についてを活発に討議していただき、市民・大学・行政の三者による協働の在り方や、大学の機能を地域に還元する具体的な取り組み、そして、若者の感性・発想を地域活動に生かす事業などについて提案していただく予定です。

それでは、ここより、コーディネーターの田中様に進行マイクをバトンタッチいたします。

田中様、どうぞよろしくお願ひいたします。

4 . 研究フォーラム

「大学と地域の連携

- 新しいまちの未来へ向けて」

～はじめに～

コーディネーター(田中久和氏)

只今ご紹介いただきました田中と申します。

研究フォーラムということですが、平安時代の大変優雅な雅楽の音を聞かせてもらいまして、ゆったりしたい気持ちになった後に、また研究フォーラムということで、何か地上の世界に戻ってきたかのように、気分を変えなければいけないと思っております。

今、司会の方からご案内いただきましたように、枚方市内には6大学がございます。今日は3大学の先生方にパネリストになってもらいまして、枚方市の地域生活、市民の方たちの生活に開かれた大学の在り方について、現状ではこうであって、これからはどういう構想のもとに、計画されているかということについて、お話し願ひたいと思っております。

それと、中司市長にパネラーになっていただいております。生涯学習を地域生活の課題としていかなければいけないことは、冒頭の文部科学省の布村生涯学習政策課長の方からお話があったとおり、日本もいろんな高齢化社会、少子化を背景といたしまし

て、生涯学習ということが、社会・国を挙げての大きな課題になっていると思います。

先ほどの布村さんのお話ですと、枚方市は、そういう点では大変先端をいく自治体だというふうなことであったわけですが、行政のお立場から、生涯学習というものに、現在どのように取り組んでいらっしゃるかって、これからどのような展望とかビジョンを持って取り組まれていくのか、それについて市長の方からお話をいただきたいと思います。また、もう一つ大事なこととしまして、大学が市民や地域生活に対して開かれた大学になるという課題、それと行政の立場として、生涯学習を最優先課題の一つとして取り組んでいかれるということですが、何と言いましても、枚方に住んで生活しております私たち市民の立場から、現状の問題ではこうであって、今後の課題がいっぱいあるということ、NPO代表の野村さんの方から具体的にお話をいただければ大変ありがたいと考えております。

それぞれのお立場から、現状の取り組みと課題についてお話しいただいて、全体3部構成を考えております。時間も80分ということですので、余り白熱した議論も難しいと思っておりますけれども、最後の20分余りで、それまで話されたことを内容として、具体的な問題点・課題について焦点が絞れましたら、それについてパネリスト同士で話し、徹底的に論点を深めてまいりたいと考えております。



お聞きになっている皆様もご意見やご感想がおありだと思いますので、パネリストへの質疑応答があれば一番いいと思います。ただ、時間の制約等がありますので、この場では具体的なやりとりはできないと思いますけれども、今日だけの催しということで

はないと思いますし、今後いろいろな機会をとらえて、ご意見、ご提言なり、ご感想がありましたら、率直に申し出ただいただければ、さらに意義あるものになるのではないかと考えております。

それでは順次、生涯学習に取り組んでいらっしゃる大学の現状について、ご紹介いただきたいと思えます。はじめに、大阪国際大学学長の金子先生から、よろしくお願ひいたします。

～大阪国際大学の取り組み～

大阪国際大学学長(金子敦郎氏)

それでは、私から口火を切らせていただきます。

初めに、簡単な自己紹介でございますけれども、私、実は長年、マスコミの世界で仕事をしておりまして、アジアとかアメリカなどで何年かを過ごしました。この大阪国際大学に来てから7年目、学長になってからは3年目でございます。

大阪国際大学の簡単な紹介をさせていただきます。私どもの大学は、1988年に開学いたしました。まだ15年目ですから、新興大学の部類かと思うんですけれども、私どもと同じ学校法人の大阪国際女子大学というのが守口市にございまして、実はこちらの大学の方がずっと老舗であります。私どもの方の大学の方が、むしろ分家というような関係になっていたんですけども、昨年4月にこの二つの大学が統合いたしまして、現在、ちょうど1年半が過ぎようとしているところであります。

そういうことで、二つのキャンパスにまたがりまして、経営情報学部・法政経学部・人間科学部と三つの学部、それともう一つ短期大学部ということで、実質4学部、学生5,000人です。

枚方市にあります枚方キャンパスの方は、学研都市線の長尾駅から歩いてちょっとということで、正直申しまして、交通の便、アクセスは、余りよくなかったのですが、最近、第二京阪高速道路が本学の校庭のすぐ近くまで開通いたしまして、これが何年か後には大阪市内にもつながるということで、大変便利になると期待しているところであります。

私ども大学の新生に、この大学へ入って何が一番よかったかというふうに聞きますと、大抵の学生は、大変校舎がきれいだというふうに申します。丘の上に、緑に包まれた赤レンガの校舎なんです、大変きれいな、格好のいい大学だというんですが、中身をこれからどういうふうによくしていくかということで、私ども教職員いろいろと頑張っているところがあります。

私どもの大学の基本理念は、国際大学ということでございますので、「グローバルマインド」という言葉を掲げております。これは翻訳する必要はないかと思いますが、一言で言えば、国際化した世界に生きる心を持った人材を育て、社会に送り出していくということだと思います。

しかし、世界に通用する人材を育てるためには、やはりまず日本をよく知らなければいけないし、日本をよく知るためには、まず地域を知らなければいけない。そして地域にしっかり根を下ろした大学になっていくということが一番大事な、まずはそれが基礎になるのではないかなということで、私ども、必ずしも十分成果が上がっているかどうかわかりませんが、地域とのつながりというものを、それなりに一生懸命やってきたつもりです。

毎年開催されております枚方市主催の市民大学にもできる限り協力してまいりましたし、あるいは枚方市の文化振興事業団というようなところにも参加をしております。それから、「学園都市ひらかたフォーラム」の資料10ページにもございます、「ふれ愛・フリー・スクエアにおける学生ボランティアの参加」というようなところでも、できる限りの協力といたしましうか、協力と申しますよりも、私どもの学生自身、こういうところでいろんなことを学んでいくということで、多くの学生諸君に参加していただいております。

それから、私どもの大学の枚方キャンパスのすぐ背中合わせのようなところに、「王仁博士の墓」というのがございます。ご存知のように、王仁博士というのは、朝鮮半島から日本に漢字をもたらした方だというふうに言われておまして、枚方市当局も、

この王仁の墓にちなみまして、毎年「漢字まつり」をやっておられますけれども、この事業にも私ども参加いたします。特に、今年は10月の学園祭の日に、同時開催をするというようなことで一生懸命取り組んでいるところであります。

一つだけ強調しておきたいことがございます。それは地元の放送局として、FMひらかた放送がございましたけれども、うちの学生諸君が、毎週1回、定期的な番組をつくるということで、参加いたしております。深夜番組なんですけれども、なかなか自由におもしろい番組をつくっておりますので、皆さん、もし夜にちょっとお時間ありましたらスイッチをひねっていただくとありがたいと思っております。

とりあえず、私どものこの地域とのつながりといったことについて報告をさせていただきました。

コーディネーター(田中久和氏)

ありがとうございました。

次に、大阪工業大学情報科学部長の木村先生からお話をお願いいたします。

～大阪工業大学の取り組み～

大阪工業大学情報科学部長(木村磐根氏)

只今ご紹介いただきました大阪工業大学情報科学部長の木村でございます。

大阪工業大学の情報科学部は、ちょうどこの楠葉から東の方に5キロぐらい行きました、いわゆる家具団地に囲まれた、北山の小高い山の上にあります、国会議事堂のような建物ということで、かなり遠方からも目立った建物でございます。

この情報科学部は、7年半前の平成8年にできました。親校になります大阪工業大学は、大阪市の旭区大宮、淀川に面したところにございまして、大学としては50年余りの歴史がございます。そこには工学部と、今年新しくできました知的財産学部があります。知的財産学部は日本で始めてできた学部でございます。その上に、大阪工大摂南大学という学校法人があり、そのもとでは、摂南大学、それから広島島の広島国際大学、大阪工大と三つがございます。

この枚方市の六大学の一つは、その摂南大学、親校は寝屋川でございますけれども、その薬学部が、ちょうど我々のすぐそばで、むしろ我々の情報科学部よりもずっと前から、家具団地のすぐそばにあるわけでございます。

大阪工大情報科学部は、できましてちょうど7年半になりますが、今現在、学生数が1,700名ぐらいで、情報関係の三つの学科からなっております。



我々の大学の特徴としましては、専門の教員が今40人おりますが、その半分以上が企業出身の方々です。特に、新しい情報技術に関しては、もちろん大学の出身の先生方も必要ですけど、実際に現場で物づくりに携わった方々が教員として活躍していただくということが大変役立ちます。そういうこともありまして、就職関係については、内定率が非常に高く、いつも95%ぐらいになっております。そういうことで、就職支援活動を非常に熱を入れてやっているわけでございます。

地域との連携についてちょっと申し上げますと、枚方市民の方々との交流としては、大学の周りに非常に広いグラウンドを持っておりますので、夏には盆踊りとか花火大会とかにお使いいただいたりしております。

それから、11月になりますと、我々の学園祭、「北山祭」というのがありますが、これは11月3日と決まっております。これは学生が主体で企画し、その中では、市民の方々と一緒にフリーマーケットをやっております。約200店舗で、参加者が毎年数千人に上っております。

こういう催しだけではなくて、大学側としては、

今年は40研究室のほとんどが研究活動のご紹介という意味の研究展示をすることになっております。どんなことを情報技術でやっているか、市民の方々に是非ご覧いただきたいと思っております。

それから、これまでは毎年続いておりますけれど、枚方市が主催しておられます、コンピュータグラフィックを使ったマイページのコンテスト、いわゆるマイページコンテストの審査委員長を、ずっと当情報学部の柴田教授が担当しております。また、その参加者に対して、いろんな制作上の指導とか、それからコンテスト発表の日には、いろいろ学生の作品展示とかをさせていただいております。

平成13年度には、政府のIT戦略でIT講習会というのが大々的に行われましたけれど、約200名の枚方市民の方々の情報教育を、当情報科学部で引き受けさせていただきました。

それから、市民大学講座、これは我々の大学だけではなくて、六つの大学すべてやっていますが、我々に関しましては、情報技術に関連したことで、例えば、デジタル革命の話とか、モバイルとモビリティの話とか、ロボットの話とかというのをずっとやっております。今年は12月6日・13日の2回行われますけれど、インターネットの利用と諸問題、特に最近、ウイルスとかいろいろありまして、セキュリティの問題が大変重要でございますが、そういうことも取り入れた講演を中西教授がいたします。

今後の話でございますけれど、うちの学生のボランティア活動ですが、近くの長尾小学校とか西長尾小学校の生徒さんたちに、コンピュータの使い方等をお教えするという活動に協力するというのを今年から始めることになっておりまして、今スタートしかかっております。

以上で、私のお話を終わります。

コーディネーター(田中久和氏)
ありがとうございました。

それでは、関西外国語大学教授の上野先生からお話をお願いいたします。

～関西外国語大学の取り組み～

関西外国語大学短期大学部教授(上野武彦氏)

上野でございます。プロフィールは、お手元の冊子の7ページに載っておりますから、ご覧ください。載っている写真は、今の私と大分違うようですが、意図的に若いときの写真を載せたわけではありません。

子供のときから本が大変好きで、本にかかわる仕事をずっとしてきて現在に至っております。教えているのは図書館学です。

大学の簡単な紹介ですけど、関西外国語大学には、中宮キャンパスと穂谷キャンパスと二つキャンパスがあります。中宮キャンパスは、外国語学部と短大の英米語学科、穂谷の方は、国際言語学部と短大の国際コミュニケーション学科があります。両キャンパスとも1学部と1短大ということになっております。詳しいことは、15ページをご覧くださいと思います。

市民の方に対する文化事業ということでは、ほかの大学もいろいろやってらっしゃいますように、市民大学講座を昭和61年から開いております。私どもの大学のいろんな先生が、国際化と日本というようなテーマで毎年、お話をされているわけです。

それから、図書館の連携事業では、現在、穂谷キャンパスの図書館だけ、枚方図書館を通して申し込みがあれば貸し出しができる、コピーができる、それからレファレンスにお答えができるようになっております。片鋒の図書館は、ちょうど移転にかかる時期でしたので、現在の中宮の図書館と同じように市民の方が利用できるというようにはなっておりません。

それから、もう一つ、皆様もう既にご存知と思いますが、片鋒から中宮にキャンパスを移転するときに、図書館には車がついておりませんから引っ張っていくわけにはいきませんので、枚方市に寄付をさせていただきました。あと一年半ぐらい先ですが、平成17年度に枚方市の中央図書館として、市民の皆様の前にお目見えをするため、整備中だとい

うことになっております。「広報ひらかた」等で詳しく報じられておりますので、いろいろご存知ではないかと思えます。

簡単ですけども、大学につきましては以上でございます。

コーディネーター(田中久和氏)

ありがとうございました。

それでは、NPO法人NALC枚方代表の野村さんからお話をお願いいたします。

～NPO法人NALC・生きがい創造学園の

取り組みと生涯学習の魅力～

NALC枚方・交野「天の川クラブ」代表(野村文夫氏)

野村です。今から8年前に、ニッポン・アクティブライフ・クラブ、略してNALCに入りました。また、今年度から枚方市の生きがい創造学園の受託者という形で、運営を委託させていただいております。

8年前といいますが、阪神・淡路大震災が次の年にあったわけですけども、そのときに、私はちょうど定年になっていたわけです。ボランティア活動というのは非常に大切だということを、しみじみと感じたということもありまして、たまたま私の上司がNALCを始めた人間でありましたので、誘われるままに入って、もう8年になります。

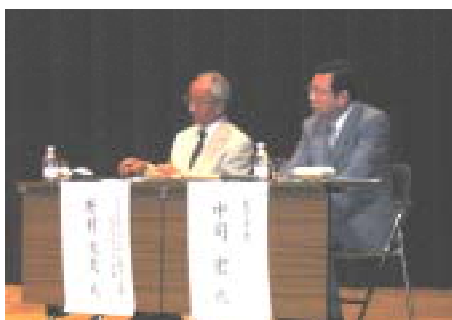
今日は、周りの皆様が大学の先生という偉いばかりですので、多少恐縮しているんですけども、一般市民、またボランティアという立場から意見が言えたらと思っておりますので、よろしく申し上げます。

先ほど申し上げたNALCは、ボランティア団体です。基本的に50歳以上の方に入っていただきます。しかし、若い人も拒まないということで、平均年齢が今61歳の団体です。男性が非常に多くて、45%を占めています。普通、ボランティア団体というと女性がほとんどで90%というふうなケースが多いんですけども、私どもの場合は、そういう内容になっています。

モットーは「自立」で、いつまでも健康で、経済的にも、精神的にも自立しようというものです。それから「奉仕」。ボランティアを生きがいにして、生涯、社会に貢献し、それから「助け合い」をしようというものです。困ったときは会員相互の時間預託制度というのがありまして、1時間、人のためにやりますと1点もらえるということで、それをためまして、今度は自分が少し体が弱ったり、また何か助けてもらいたいことがあったりしたときには、その1点を差し上げて会員に助けてもらう、いわゆる会員同士の助け合いを行っております。

例えば私の場合、博多に母親がいるんですけども、母親が何かあったときには、博多のNALCのメンバーに助けてもらうということをやっております。

そういうことを通じて、いわゆる「自立した生きがいのある人生を生きる」というのがモットーであります。



NALCは平成6年、今から8年前に発足いたしました。平成10年にNPOの法人認定を受けました。これは全国的にも最初の法人認定になります。今、全国に88拠点、入会者の数で言うと1万5,000人余りの組織になり、枚方・交野については、600名の会員で、活動時間が1万2,000から1万3,000時間ぐらいになっております。内容的には、いわゆるボランティアとしての在宅支援や家事援助、送迎サービスを行っております。また、パソコンを指導したり、天の川や公園などの清掃もしています。他に、特別養護老人ホームの支援事業、それから、先ほど少し申し上げた生きがい創造学園の運営、また配食サービスのお手伝いということをしており、61歳と平均年齢は高いんですけど、皆、

結構元気で頑張っている団体でございます。

第二に、枚方市から委託されております生きがい創造学園ですが、これは枚方市が、平成7年にスタートされた学園です。そのとき案内書には、「世界トップレベルの長寿国日本が、平均寿命80歳を超える今、自立心を持って生きることが問われている」ということが書かれ、始まったということです。

目的は、健康の維持、生きがいと創造を持った暮らしづくりの応援ということと、社会参加の促進、また、学園の段階的な発展を軸にして、学びたいことを自由に学ぶ場の提供ということで、私どもが、今年から引き継いで一生懸命やっているのが実態でございます。パソコンであるとか、郷土の歴史であるとか、保健と予防等々19の講座があります。

受講生の皆さんは、現在520名おられるんですけど、非常に元気で、新しい知識とか技能を積極的に取り入れて、また卒業した後も同窓会をつくってやるというように、楽しみながら頑張っておられます。先生も結構高齢の方がおられますが、非常に若々しいです。

ちょうど私どものモットーといいますが、方針と全く一致しておりますので、それをさらに発展していく原動力になりたいということで、受託させていただいた次第です。

最後に、生涯学習へ向けて大学への期待ということでございますけれども、まずは、ボランティア団体の活動の活性化への支援をお願いしたいと思っております。枚方NPOセンターには、私どもを含めて108団体の登録団体がございます。ボランティア団体の活動というのは、生涯学習の柱の大きな一つです。内容的には、常に新しいことをやらなくてははいけません。どうしたらいいかと悩むことは非常に多いわけですが、そういうことに対して、是非ご支援をお願いしたいと思っております。

それから第二は、地域コミュニティとの協働です。これは最近、天の川の再生実行委員会というのがありまして、天の川を掃除する行事なんですけど、年に1回、枚方市のご協力で、やっていただいている

んです。これもコミュニティが活動されている、非常にいい例であるかと思います。行政の天下りということではなくて、自主的なコミュニティの活動を推進していくのにも、大学のご協力が、これから要るのではないかと考えております。

以上、私の方のお話を終わりたいと思います。

コーディネーター(田中久和氏)
どうもありがとうございました。

それでは、中司市長、お話をお願いいたします。

～学園都市づくりと大学との連携～

枚方市長(中司宏)

枚方市長の中司です。

学園都市ひらかた推進協議会の会長という立場でお話をさせていただきます。只今各大学の方からの取り組み、そしてNALCさんの取り組みについてお伺いいたしましたが、私の方からは、枚方市と大学とのつながり、また学園都市の考え方についてお話をさせていただきたいと思います。

枚方は、戦前から、確か昭和3年だったと思いますけれども、関西医大と大阪歯科大の前身となる専門学校が設置されました。

余談ですが、私が生まれたのは牧野で、この二つの大学が近くにありました。当時、私の家のちょうど正面に関西医大に隣接する附属病院の門がありましたので、特に印象が強いんですけれども、子供の頃、よく友達と学校の中を探検したり、文化祭をのぞいたりしたことを印象深く覚えています。

戦後、香里団地に代表されるように、枚方市は住宅都市として発展してきましたが、同時に、大学の新設も進み、それぞれ特色のある六つの大学に、約1万9,000人の学生が通う、「大学のまち」に成長してきました。

大学の存在といえますのは、学生や大学関係者による人口増加や地域の活性化、またそれ以上に、文化環境の向上とか、数値でははかれない地域へのプラスの効果があると思います。

私は、「大学の存在はまちの財産である」ということを常々申しておりますけれども、市の生涯学習

施策の中でも、大学に担っていただく、あるいは担っていただきたい役割には大きいものがあると考えています。

そこで、本市のまちづくりですけれども、三つのビジョンを打ち出しています。一つ目は、市民が安全に安心して暮らせる生活安心都市、二つ目が、市民一人一人が環境意識に目覚めた環境保全都市、そして三つ目、市民のだれもが生涯にわたって学び続け、その学びを地域のまちづくりに生かすことができ、そして生きがいづくりにつなげていく生涯学習都市、この三つのビジョンを掲げています。

この、生涯学習都市を実現する上で、大学との連携は欠かせないですし、大学との連携を図るということは非常に大事なことだと思っています。

そこで、本市では5年前から、6大学の先生方、学長さん方に参画をいただいて「学園都市ひらかた推進協議会」を開催をしてきました。お手元に資料をお配りしておりますが、様々な事業に取り組んできています。

これまでの活動実績を基盤にして、「大学のまち」としての機能、そして情報発信力、またさらに、今お話ありましたように、NPOの皆さん方との連携、そういうことをもう一歩進めていく段階に入ったと思っています。

そこで、大学の人材、先生方や研究者、また、1万9,000人の学生、そうした皆さんを地域社会のまちづくりにどう生かしていくのか、その取り組みが必要だと思います。

先ほどご紹介もありましたが、学生さんの若いパワーや若々しい発想、感性を地域活動に生かしていただきたいと、この資料の10ページに、ボランティアの学生の参加として「ふれ愛・フリー・スクエア」を紹介しています。

また、11ページには、「漢字まつり」や「枚方まつり」への学生のボランティアの参画、それから12ページには、留学生と市内の小・中学生との交流事業、そして9ページには、市役所への大学からのインターンシップの受け入れを掲載しています。そうした様々な事業を展開しているところです。

それから、先生方や研究者の皆さんの専門的な知識や意見を本市の政策に反映していこうということで、市には各種施策を検討する審議会や協議会がありますけども、今、20のそうした審議会・協議会に、27人の先生方に委員として参画いただいております。

後ほど紹介しますが、平成17年春に、関西外国語大学が移転した跡地を活用いたしまして、「人材育成複合拠点施設」と「中央図書館」をオープンする予定です。そこを拠点に、研究者の様々な情報を検索するシステムを立ち上げたいと思います。13ページで紹介しておりますけれども、「研究者情報検索システム」を構築して、研究業績や共同研究の情報などを、登録をして検索できるようにして、より一層幅広い産・官・学の連携が実現できればと思っています。

それから枚方市には、FMコミュニティ放送の「FMひらかた」とケーブルテレビの「K-cat」があります。特に「FMひらかた」には、10月の番組から、「枚方マナビスト」という生涯学習の情報番組を設けます。その中で学生さんも実際に出演をしていただいて、大学に関するいろんなプログラムを放送していただくことも可能だと思います。それから、暮らしに役立つ生涯学習のミニ講座などの番組も考えておりますし、また、ITを活用して、国内の友好都市の大学との連携も図っていきます。例えば今、友好都市の沖縄県名護市に「名桜大学」という大学があります。この名桜大学と大阪国際大学が姉妹校になっていますが、ITの活用によって、もう少し連携が図っていけるとと思っています。

それから、市内に全戸配布しております市の広報紙「広報ひらかた」ですが、そこにも6大学の情報コーナーを設けており、さらに、広報紙1面の表紙の写真も大学の写真クラブの学生さんをお願いしています。学生のレポーターが広報の取材の活動をしたり、それから11ページで紹介していますが、市役所のアートのスポットのコーナーで、写真展を行ったりもしています。

そうした活動を通して、これからも魅力あるまちをつくるために、大学との連携を深め、そして、生

涯学習全体のまちづくりを進めていくために、NPOの皆さん方との連携など、さらに広がりのあるまちづくりを進めていきたいと考えています。

どうぞよろしくお願いいたします。

～今後の課題～

コーディネーター(田中久和氏)

どうもありがとうございました。

今まで、それぞれのお立場から、地域と大学との連携や市民にとっての生涯学習の在り方について、現在の取り組みについてご説明いただいたわけです。

この後、今の現状を踏まえて、これからの問題・課題について、具体的に話し合い、指摘をしていただいて、またどういうふうな解決が可能であるか、行政のお立場からご説明がいただければありがたいと思っています。

そこで、この後の課題ですが、地域生活、枚方市民の方々の生活と、市内に所在します大学との新しい関係を、単にうたいあげるのではなくて、枚方という独特の歴史、ちょうど大阪と京都の接点なので、船宿文化等、いろいろ歴史がありますし、そうした歴史遺産の活用ということができると思います。現在、「鍵屋資料館」が淀川べりにありまして、訪れる方が多いと聞いております。地域の歴史に恵まれた枚方ですから、そういう歴史遺産というものを通して、地域生活と、大学ないしは生涯学習との新しい関係の構築について考えていただきたいと思います。

次に、今までのお話に出てきましたけれども、市民大学講座というものが実施されております。それと、「FMひらかた」が現在も放送中でして、そうしたことを、この後もさらに拡大的に発展させるにはどうしたらいいかということが2点目ですね。

3点目といたしまして、最近どこでもファカルティ・デベロップメントという、専門的な能力の向上ないしは展開ということが、盛んに私などの大学でも教官の課題となっております。基調講演の布村さんもおっしゃっていましたが、生涯学習とい

うのは、ただ学ぶだけではありません。学んだことを生活や地域文化に還元といいますか、戻していく。具体的に言いますと、今申し上げました枚方の歴史遺産等について学んだら、それをまた今度、枚方の外から枚方を訪れた方に、枚方の歴史とか文化についてお話とか、ガイドをするような、そうした相互方向性というものが、今申し上げた専門家研修のファカルティ・デベロップメントでも求められていると思います。

一つだけ具体的な例を申し上げたいのですけれども、私は、もともと東京出身でして、20年前に関西に来てからずっと枚方に住んでいます。10年ほど前ですが、東京の中学校の恩師が、神奈川県県史編さん局で仕事をしており、その方から枚方には、神奈川県の小田原の飛び地があるので、視察に来たいと連絡がありました。「飛び地」というのは自分の領国であり、小田原以外のところに領地を持っているものですが、その飛び地が枚方にもあるということで視察に見えました。その帰りに枚方の名所を三つ見てみたいということをお願いいただきました。それが百済寺跡や、牧野にあります片埜神社、これは桃山時代を代表する建築様式を伝えているんだということ、その先生から連絡をいただいて、あわてて調べたんですけども。それともう一つが鍵屋、今は資料館になっております。その三つ案内してくれないかということだったんです。それまで枚方の歴史的な名所というものを詳しく知らなかったので、急いで市が発行している様々な文献を読んで勉強した次第なんです。その神奈川県の県史編さん局の方をご案内しながら、私はだんだん枚方市民として誇らしいような気持ちを持ってきました。普段から生活している者として、きちんと知っておくだけではなくて、生活の中で親しんでおかなければいけないと改めて感じましたし、今の鍵屋などもそうですけれども、船宿文化、船宿の、ちょうど京都と大阪の中継点、淀川の中継地ですから、伝統的な文化に恵まれていることをもっと生かせたらと思いました。

先ほど、日本の伝統文化というものを、これからいろんな形で大切に、それを基盤とした国際化と

いうことをお話になっていましたけれども、そういう点で、歴史遺産の活用という大きなテーマに、枚方は豊かに対応できる様々な遺産というものを持っていると思います。

コーディネーターの話が長くなってはいけませんので、今申し上げたことを含めて、具体的な取り組みについてお話しをいただいて、その後、フリートークで論点を深めていきたいと思います。

それでは、野村代表の方から、今後の課題について具体的なご提言やご意見がございましたら、お話し願えませんでしょうか。

～市民参加による生涯学習事業のあり方～

NALC枚方・交野「天の川クラブ」代表(野村文夫氏)

今まで協議会で一緒にやってこなかった新入りでございますので、私の方からは全く新しい目で、感じたことをそのまま申し上げたいと思います。間違っているかもわかりませんが、その点はご容赦をお願いしたいと思います。

まず私が感じたのは、今、大学と市民とが共生していかなければいけないということです。今の状況について大きく言えば課題認識が必要で、市民側の学習ニーズと、大学側のニーズが、本当に合っているのだろうか、どうしたら合うのだろうかということを考えていかなければならないと思います。

私の友人にも、大学の市民講座を聞きに行こうと、よく私に声をかけてくれる友人がいます。また、市や大学の図書館に行って、「こんな勉強したよ」ということを盛んに言ってくれる人がいます。私自身が余り熱心でなかったもんですから、そういう人は、まだ非常に限られた方ではないかなと感じていますが、全体的にはそれが実情ではないでしょうか。

「提言」というと大げさなんですけれども、幾ばくか役に立つのかなということを、少し申し上げます。一つは、大学と市民の接点というものが、もっと広らなければいけないのではないかと思います。市民の意識は、ボランティア等を含めて、大きく広

がってきていて、数年前とは格段の差があると思います。

大学は、その状態をよく見ておられるのだろうか、できればもう少し市民にはっきりわかるような役立つ活動というものをさせていただき、枚方市には是非その仲介役を、果たしていただければありがたいのではないかと思うわけです。ポイントを三つ挙げてみますと、一つは、先ほどから学園都市ひらかた推進協議会が設立5年になるということでございますけれども、その推進協議会のさらなる発展ということが、必要ではないかと思えます。

一つ提案なんですけれども、ボランティアや地域コミュニティなどの市民、さらに学生に、もっと積極的に参加してもらう仕組みが必要ではないか、そういうニーズを反映する仕組みをつくるのが大切ではないかと思えます。

実は、私の友人で、大阪狭山市にいる人間がおりまして、そこは6万人ぐらいの市なんですけれども、「熟年いきいき事業実行委員会」というのがあります。37名の方が参加しておられますが、全員一般市民なんです。しかも、それで五つの事業、「熟年大学」と「いきいき農園」、「いきいきウォーキング」、「万葉口マン歴史探訪」、「いきいきネットワーク」というような企画を全部しているわけです。そして、市は、その支援をするというふうな立場にあるようです。

そういう活動に非常に積極的な意見を持った市民の代表が参加していて、いわゆる主導権を持っている。これは面白いなと思うんです。やはり、どちらかという、学園都市ひらかた推進協議会は、実際にニーズを持った方が中心になっておられるのではないと思えます。私の誤解かも知れませんが、そう思いますので、その辺が、少しでも改善されればというのが一つの点でございます。

それから、ちょっとつけ足しなんですけれども、大学図書館の開放といいますか、今、相当開放しておられる大学もあるわけですし、枚方市もその紹介をしておられるということですが、利用の件数は、少ないなと感じます。やはり、もっともっと勉強したい人に開放していただければいいのではないかな

と思います。

それから第2点は、放送講座とかシティーカレッジ、いわゆる市民大学の構想というのは、やはり本当に市民のニーズを把握したものであってほしいということです。今度枚方市が、「FMひらかた」の中で、生涯学習情報番組というものを提供されるようですけども、非常にこれは評価できるのではないかなと思うんです。

これについても、同じく狭山の話ばかりで恐縮なんですけども、狭山のいわゆる講座を紹介するのに「ライフタイム」という、インターネットのホームページがございます。その中に非常に詳しく、年間の講座名を、誰が見てもすぐわかるように案内しておられるわけです。

枚方市のを見ますと、内容がほとんどわかりません。もっと充実して市民にPRしていただきたいものです。

第3点は、学生と市民との接点ということだと思います。そうでない大学が多分枚方市の場合はほとんどだと思いますけれども、地域の人にとって、大学のある地域は、駅から大学までの道がごみだらだけだということや、近くにあるコンビニにたむろしているというようなマイナスのイメージがある場合もあるわけです。そういうところは、最低限の問題として取り去らなければいけないと思えます。最高学府の学生であるならば、マナーはきちっと守っていただきたい。今までの中等教育の結果であるということも言えるかも知れませんが、やはり学校に何か魅力を持つということは、一般市民から見ますと学生しか見えないんですよね。学生がいかにきちっとしているかということが、大学の魅力につながるのではないかと、そして、それは大きなPRになるのではないかと思えます。

あと、小さなことですが、私どものボランティア団体の中で、英語を勉強したいという者がおりまして、ちょうど外国語大学の中にネイティブの方がおられるので、そういう方にも積極的に教えてもらえる機会があったらいいなということがございます。

以上、勝手なことを申し上げましたけれども、そのように感じております。よろしく願います。

コーディネーター(田中久和氏)

ありがとうございました。

今のお話の中で、大学の図書館をさらに開放するということや、枚方市内に所在します大学で学ぶ学生さんたちと市民の方たちの接点になる空間といえますか、エリアといえますか、そういうカルチャーゾーンみたいなものが考えられないかというご趣旨のお話があったわけですが、上野先生、いかがでしょうか。

～枚方市における生涯学習施策の今後～

関西外国語大学短期大学部教授(上野武彦氏)

枚方市は「生涯学習ビジョン」を策定されています。袋の中に資料が入っており、私も見せていただいて、全くそのとおりなんですけども、やはり事業として進め、実現するためには、アクセントをつけるといえますか、可能なものからといえますか、あれもこれも同時並行でということは、やはり無理だと思うんです。ですから、アクセントをつけていただいて、そしてゆっくりと、余りあわてずに実現するという、そういうことが必要ではないかと考えております。

最初にご紹介いただいたように、私、枚方市の社会教育委員と、それから図書館運営委員協議会の委員を仰せつかっているんですが、個人として考えておりますのは、今申し上げたようなことなんです。

それと、ビジョンに書かれていることを実現していくには三者、市民と行政と事業者がお互いにパートナーとなって進めるということが書いてありますし、確かにそのとおりだと思います。しかし現実には、行政の力が非常に大きいわけですから、音頭をとっていただくのは、とりあえずは、行政ではないかなという気がしております。

そういうことは、市長さんは十分ご承知なわけで、推進体制、再編とか連携とかいう文言がありましたけれども、私も大阪府に長年職員として勤務しておりましたから、役所の悪い面は重々承知しております。どうしても縦割りになってしまいがちなわけですから、縦割りのマイナス面をできるだけ減らす努

力をしていただく必要があると思います。

では、何から始めるかということなんですけれども、図書館に関係しているからということではありませんが、やはり生涯学習の中心、基盤は図書館だと思うんです。今でも各地にたくさんの図書館がありますけれども、以前は、枚方の図書館は先進地域ということで、あちこちから見学に来るぐらいだったんです。それがちょっと地盤沈下をしておりましたが、幸いといえますか、外大の方から図書館棟を寄付ということがありまして、再来年、中央図書館として整備されることになりました。先ほどの文部科学省の課長さんのお話にありましたように、学校教育の現場では、今年の4月から小・中・高全部ですが、12学級以上の学校では、学校図書館に司書教諭を配置する義務が生じることになりました。枚方市も、司書教諭を配置しているわけですが、学校関係、図書館関係の人の希望に比べると、大分不十分なんです。けれども、不十分というのは、いずれ十分になるということだと思います。

公共図書館には司書がおりますので、司書と司書教諭がタイアップをして、先ほどからいろいろ出ている子供たちのことや、広い意味で生涯学習のことを考えれば、少しずつ明るい未来が見えるんじゃないかと考えております。

それと、外大では中学・高校の英語の先生にいろいろ研修をしております、それを少しご紹介させていただきます。私も長い間、英語を勉強しましたが、読むのがやっとなで、白状しますとほとんどしゃべれません。

ことばを使えるというのは、しゃべることも、読むことも、書くこともできるということだと思いますが、平成14年に文部科学省の方では、「学校教育における英語の授業をコミュニケーション能力を重視するものに改善するための英語教員の資質向上」という構想・戦略を立てました。

それを受ける形で、大阪市の教育委員会は、英語科教員の指導向上講座を今年から実施するため、外大の方にやってほしいということで、主催は大阪市の教育委員会なんです、大阪市中・高の英語の

先生を対象に研修をしました。

あわせて、大阪府の教育委員会の方も、外大主催で「英語コミュニケーション・スキルアップ講座」をやりたいということで、7月に開講しました。ネイティブの先生はたくさんいらっしゃいますので、外国語としての英語教授法の資格を持っている外人の先生から、153名だったと思いますけども、中・高の先生たちが実践的な指導を受けられたということで、今後も数年続けるということになっております。

感想と申しますか、個人的なことを少し言わせていただきます。

この英語の授業と関係があるんですけども、今年10月号の「文藝春秋」に、劇団四季の主宰者で演出家の浅利慶太さんのエッセイが載っていました。あの方は演出家ですから、発音とか話し方に対して、非常に厳しいんですね。

浅利さんが言うには、古来、日本は、「読み・書き・そろばん」、「読み・書き・算」が教育の基本だと言われてきたことが、非常に不愉快だということです。「読み・書き」の次に「しゃべる」「語る」があって、それから「そろばん」ではないか。それが抜けているということは、日本人は「しゃべる」「話す」ことを軽視してきたのではないかと。

僕は、これまでこういう考えは聞いたことありませんでしたので、非常に我が意を得たというか、日本は、読むことと書くことだけで、話すことが落ちていたと気づかされました。英語の授業も、昔は読むことと書くことで、大学の入学試験も、書くことと読むことだけなんで、英文和訳と和文英訳だけでした。ですから、これからは浅利さんが言うように、読み、書き、それからしゃべる、そしてそろばんと、これが教育の基本だということになるべきではないかと思いました。お読みになってない方がいらっしゃるかもしれませんが、ご紹介しました。

コーディネーター(田中久和氏)

ありがとうございました。

学生と地域に生活する市民の接点の拡大、ないしは新しい提携の在り方ということが今、論点になっ

ているんですけども、地元の企業や地場産業との交流・共同研究をつくり上げていく可能性や、そのための前提について、木村先生、お話しくださればと思います。

～産官学交流の可能性～

大阪工業大学情報科学部長(木村磐根氏)

先ほどは、市民の方々と大学の交流というお話でしたけれど、枚方市には、企業団地や家具団地など、企業がたくさんありますので、そういう方々との交流も非常に重要ではないかと思います。

大阪工業大学は、技術が主の大学ですが、実は産学連携に関しては少し遅れておりまして、今年から始めております。その産学公の連携の推進委員会ができてまして、リエゾンオフィスも開設されました。

大阪工大のホームページは、このパンフレットの16ページにURLが出ておりますけれど、「<http://www.oit.ac.jp>」でございます。ホームページにお入りいただきますと、「産学公連携」という窓口がありまして、それをクリックしますと、それぞれ大阪工大の工学部、情報科学部、知的財産学部、三つの窓口があります。またそれぞれをクリックいただきますと、その中に属しております専門の教員のリスト、それぞれの教員がどんなことをしていて、それから今の連携という意味では、こんなことでお役に立つのではないかという内容がリストアップされております。ですから、それをご覧いただいて、ご関心のおありのところがありましたら、先ほどのリエゾンオフィスへコンタクトいただきますとリンクができ、具体的にお話し合いが始められることになっております。

特に、先ほど申しましたように、枚方には企業団地とか家具団地もありますし、そういう企業の方々と一緒に、情報技術を生かすという意味で、何かお役に立つことがございましたら、共同研究などさせていただきますと思います。

もう一つは、昨年4月から、情報科学部に情報メディア学科という三つ目の学科ができました。この学科をつくるにあたり、バーチャルリアリティ、それからデジタルアーカイブという、とても大きな

億の単位の設備が備えられました。

バーチャルリアリティというのは、いわゆる仮想現実と言われるものですが、3次元の映像をコンピュータグラフィックでつくるといって、そういう技術の研究のほかに、映像を大型の円筒のスクリーンに投影して、見る人にとって精神的な安らぎや癒しということの効果があるかどうかというようなことを調べる研究もやっております。

デジタルアーカイブというのは、いろんな立体像をデジタルデータとしてコンピュータに取り込むということです。静止した立体像、あるいは運動している人物などを複数のカメラで撮影して、データとして取り込むというわけです。例えば、「能」「舞」といったような無形文化財の保存もできますし、スポーツ選手の各部位の動きを解析したり、それから有形の文化財もデジタルアーカイブとして保存するということができます。そういう分野の設備を使う面で、一緒に何か共同研究をしたいとか、あるいはこういうものは保存したいとかですね、是非またこれもお申し出いただきたいというふうに思っております。

今後とも産学公連携へ向けて何らかのお役に立ちたいと思っております。

コーディネーター(田中久和氏)

ありがとうございました。

それでは、金子先生には、枚方の大学で学ぶ若い人たちに、ただ通学途上で通り過ぎてしまうだけでなく、枚方のまちで、もう少し時間を過ごして、ゆったりとくつろいでもらえるような都市の空間や、若者に魅力のあるまちづくりの必要性が、これから求められていくと思いますので、そのことについてお話しさせていただきたいと思います。また、国際大学で取り組んでらっしゃるように、国際化社会の中で、外国の大学との提携や交流を行うことが、ひいては地域の文化・経済の活性化につながっていくということも考えられます。フランスのエセック大学院大学の研修受入れ事業に大阪国際大は参画されていますので、そのことについてお話しできればと思います。

～若者に魅力のあるまちづくり～

大阪国際大学学長(金子敦郎氏)

実は私、今日この会の始まる前に、野村代表にちょっとお会いしたんですね。そしたら野村代表は、私どもの大学のすぐそばに住んでおられるということ伺いまして、「しまった」と思って、思わず視線をそらせたんです。

と申しますのは、先ほど野村代表が指摘されておられましたけれども、私のところの学生諸君が、大学の近くのコンビニでお弁当を買って、近くの公園へ行って食べるんですね。それで、その食べかすを散らかして帰ってきちゃうというようなことで、地域の方からクレームを受けました。

これはいけないというので、2年ほど前に、環境週間というものを設定いたしまして、環境問題をいろいろ学ぶと同時に、大学あるいは地域の清掃活動に学生をかり出したんです。ゼミごとに時間を決めて、ごみ拾いに取り組みましたら、普段はゼミで居眠りばかりしているような学生が大変生き生きとごみ拾いを頑張りました。その後、レポートを書かせましたら、やっぱりポイ捨てはいけないんだとか、あるいは、ごみ問題、廃棄物問題等々がよくわかった、というような大変殊勝なレポートを何人もの学生が書いてくれたんです。それから2年もたっているのに、また地域を汚しているのかと思って心配になりました。忘れないうちに、またそのようなことにも取り組んでいきたいと思っております。

市民と大学の接点というのは、いろいろあるかと思うんですが、大学からしますと、市民の方から大学に刺激を与えてもらうということが、生涯学習の一つの重要な面だと思います。

今、生涯教育といいますが、先ほどの文部科学省の布村課長さんのお話にもありましたけれども、大学が市民につながるようなカリキュラムをどのようにつくっていくか、そこでいかに市民の方に勉強していただくかというようなことも一つ重要なポイントなんです。これは非常に大事な問題で、私どもの枚方キャンパスでは、何年か前から、市民と学生が

一緒に勉強するという特別な科目を設定しております。前期は「現代の国際情勢」、後期は「現代社会と法」ということで、うちの大学の専門の先生プラス、学外の専門の方、あるいは実際に関わっておられる現役の方などに来ていただいて、週1回の講義を行っています。学生と地域の市民の方々が一緒に勉強されるんですが、今日この会場でも、前の一番近い席がちょっと空いているんですけども、いい席といひましようか、講師に一番近い席は大体市民の方がバシッと押さえておりまして、とても熱心に聴いておられるんです。終わった後の質疑応答も、大体市民の方がされております。学生はどうしているかといひますと、ちょっと遠巻きに後ろの方で居眠りしたり、おしゃべりしたりするというようなことになる。

特に外部の講師の方に来ていただいたときは、これではまずいというので、私などもその教室に行きまして、居眠りしている学生を、ちょいと蹴飛ばして目を覚まさせたりするんですけども、本当に市民の方は熱心に勉強されますし、ポイントをついた質問をされることで、学生諸君に大変刺激になっているようです。これからもどんどん大学に導入していきたいと思っています。

そんな中で、只今田中先生の方からご指摘がありました。私どもの大学は、枚方市のプログラムをサポートするというので、フランスのエセック大学院大学生の研修受け入れに協力してまいりました。このプログラムは、もう10年も続いていて、市そして市民の方の受け入れ、ホストファミリーという形での受け入れなどもあり、大変な事業だと思っておりますが、長く続いています。

それなりに私どもも参加させていただいて、大変ありがたいんですけども、正直言いまして、10年ずっとやってきましたと、マンネリといひましようか、新しいアイデアも枯渇してくるというような面も、率直に言っております。

今日、改めて認識したんですけども、この冊子などを見ましても、枚方市の6大学というのは、実に多様性、バラエティに富んだ特色のある大学でし

て、こうした六つの大学が一つの市に集中しているというのは、大変珍しいことではないだろうかと感じました。例えば、エセック研修のようなプログラムを、六つの大学が、それぞれの特色を生かした形でサポートしていくというようなことができれば、ますます発展していくのではないかなと思います。また、新しいプログラムをつくる場合も、一つの大学では、こなしきれないようなことも多いと思っております。

そのあたり、市の当局にもいろいろとイニシアチブをとっていただければ、さらに多様性に富んだ大学と市民との協力関係、あるいは新しい接点をまた開拓していくことができると思います。

もう1点、私どもの大学で今後できることについていろいろ考えております。守口のキャンパスと一つの大学になりましたが、守口の大学はずっと女子大だったんです。女子のスポーツという面では大変伝統がありまして、バレーボール、ソフトボール、ラクロス、あるいは陸上競技等々、関西の大学ではトップクラスといったような選手が大勢おります。

それから、枚方の方も部分的には、なかなか頑張っているスポーツもあるんですけども、大学としまして、スポーツ振興をもっとやっていこうと取り組んでいます。スポーツを通じての市民とのつながりということも非常に大事ではなからうかなと思いますし、うちの大学としてできることではないだろうか感じております。

他の大学でも、全国的あるいは国際的にも高いレベルの選手をたくさん擁しておられると思いますけれども、私どもとしては、小・中学生あるいは市民の方と一緒に、様々なスポーツを通じて健康増進していく、生活を豊かにしていくというようなことで、そこに私どもの持っている可能性を投入していくことも可能ではないだろうかと考えています。

それからもう一つは、学生のスポーツと同じように、音楽やその他の文化活動において、一つの大学でもできるでしょうし、あるいは六つの大学が、いろんな形で協力し合って、市民とのつながりの一つ

のでこにしていくといふうなことに取り組み、枚方市全体が、若者たちにとっても、生き生きと活動できる場というものをつくっていきけるのではないかと考えております。

コーディネーター(田中久和氏)

ありがとうございました。

只今さまざまなお立場から、この後の生涯学習の在り方について、また新しいまちの未来の設計など課題となることについて、いろいろご提言やご意見をいただきました。

中司市長に、今の幾つかの課題に対する、行政のお立場からのお考えをお話いただければありがたいと思います。

～今後の課題に対する市の見解～

枚方市長(中司宏)

今、それぞれのお立場からご意見をいただきました。特に、大学と市民との接点、そして学生と市民との接点、これをどう広げていくのかという点、それから、企業との連携という点、そしてまた、特色をさらに生かした連携、スポーツや文化活動での連携など、さまざまなご意見をいただきました。それと同時に、あわてず慎重にといたしますか、じっくりと一歩ずつ、市が縦割りをなくして、音頭をとってやっていくべきであろうと、そのようなお話もいただきました。

市の方では、この生涯学習施策全体の中心を担う施設として、人材育成複合拠点施設をこれから整備していきます。そこでは、ITの普及機能を持った生涯学習支援センター、ITによる能力開発やニュービジネスの創出、国際交流の支援などの機能を併せ持つ地域活性化支援センター、それから、市の防災活動の拠点となる地域防災センター、この三つのセンターを開設していきます。そして、教育委員会もそこに移転をします。また、関西外大から譲り受けました図書館をリニューアルして、市の中央図書館として併設し、市内の大学図書館との連携の拠点としていきたいと考えています。

昨今では、特に国語力の低下や活字文化の衰退が指摘されていますので、中央図書館、それから生涯学習支援センターを活用しまして、「漢字のまち枚方」の関連事業も進めていきたいと考えております。

それともう1点は、ファカルティ・デベロップメント、能力開発ということでご指摘いただきました。既に関西外大で府教委の事業として、本市の中学の英語の教師が、夏休みの間に英語の研修を受けさせていただいております。

本来、教員の研修を目的としたものがファカルティ・デベロップメントでございますけれども、専門家を育成・研修するという観点では、ぜひ生涯学習支援センターで市民の皆さんを対象とした研修もしていきたいと思います。そして、そこでの学びを地域活動に生かして、市民の皆さんの生きがいづくりにつなげていきたいと考えています。そのときには、市内の大学の先生方、研究者の皆さんに講師としても支援をしていただきたいと思います。

先ほど、百済寺とか枚方宿鍵屋資料館の話もありましたけれども、一例として、現在、NPO法人枚方文化観光協会が観光ボランティアの育成に取り組んでおりまして、約40人ぐらいの観光ボランティアの方々に、観光のPRや案内をしていただいております。そうした観光の専門家を育成することで、地域の活性化に向けた広がりが出てきていると思います。

こうした取り組みは一つの例ですが、他の分野にも広げていくことができると考えております。

それからもう一つは、2万人近い学生が、この枚方で青春を過ごすわけですから、このまちの歴史や文化をよく知らないまま卒業されるのは、本当に惜しい気がします。もちろん卒業されてからも住み続けていただきたいと思いますが、仮に他のまちに行かれた後も、枚方の魅力を内外に発信する、ローカル・アンバサダーというんでしょうか、「大使」役を担ってもらえたらいいなと考えております。そのために、学生対象の「枚方学」特別講座も開催したいと考えています。

それから、ハードの部分のまちづくりですけども、この楠葉の地域は、これから高層マンションのくずはタワーシティの建設や、駅前のモール街リニューアルが予定されておりまして、新しいまちに変わっていきます。

またアクセスも、樟葉の駅と枚方の駅に特急が停車するようになりました。そして、第二京阪が、あと5年すれば全線開通しますし、長尾も駅前広場の整備を進めていきますし、JRも本数が増えました。そうしたことで、大学へのアクセスも、かなり整ってくるのではないかと考えております。

枚方市の中心部となります市駅の周辺では、東海道の57次の56番目の宿場町でありました枚方宿の景観を、少しでも保存・復元する町並みの整備を、歴史街道整備事業として進めております。今後、できるだけ早く駅前のクラボウ跡地に、PFI事業で総合文化施設を建設していき、それと同時に、ウォーターフロントを整備して、淀川の河川公園に船溜りを整備し、淀川の舟運も復活させたいと、いろんな構想を持っています。

学生に対するアンケートを前に実施したときにも、例えば、映画館が枚方にないので、できるだけ早くつくってほしいとか、集客施設をもっとつくってほしいとか、まちの魅力づくりを望む学生の方がたくさんおられました。

ハード部分も整備をしながら、学生の皆さんが定住してもらえるような、そして、高齢化社会の中でも若いまちをつかっていきたいという思いを持っています。

それから、先ほどの淀川舟運の件ですけども、観光資源として、淀川のエコミュージアムの構想を持っています。これは、本年の3月に開催された「世界水フォーラム」の水と交通の分科会におきまして、本市も参画をした淀川の舟運セッションで発表されたもので、淀川の流域を、環境や文化や歴史資源の研究・保全・展示できるオープンエアとしてのミュージアムにしていく、淀川そのものをオープンエアのミュージアムにしていこうという構想です。これを枚方市駅の周辺の整備構想とあわせて、この

エリアを川に向かって開かれたまちにしていきたい。これまでのまちづくりでは、川とまちは遮断されていましたが、これからは、川に向いたまちをつくっていこうという思いを持っています。

これは従来の市街地再開発の発想ではなくて、エリア全体を、文化や歴史や環境学習の場として、また情報発信の場としていこうという考えでして、生涯学習の都市ビジョンと結びつけて、具体化していく中で進めていきたいと思っています。

先ほどご指摘いただきました問題点・これからの課題を踏まえ、将来への夢が広がるまちをつかっていきたいと思っています。このフォーラムで学ばせていただきましたことを、これから生かしていきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

コーディネーター(田中久和氏)

どうもありがとうございました。

今、市長の方から、学園都市の在り方について、展望や構想をお話しいただき、希望が持てる気がいたしました。

今取り組んでいらっしゃる問題の現状と、今後の課題を、それぞれのお立場でお話しいただいたわけですが、もう少し話しておきたいということがございましたら、ご自由に発言なさっていただきたいと思っております。いかがでしょうか。

～フリーディスカッション～

関西外国語大学短期大学部教授(上野武彦氏)

私は、枚方に映画館が欲しいと思っていたんですよ。ただでも市長さんがおっしゃいましたから、改めて申し上げることはないんですけども、学生は、映画を見ようと思えば、京都か大阪に行くか、あるいは枚方大橋を渡って高槻へ行くしかない。ミニシアターでよいので、是非枚方市内に映画館が欲しいというのは、学生も言っていますし、僕らも切に希望しています。

コーディネーター(田中久和氏)

映画館やムービーシアターというのも、最近はかなり考え方が違ってきているそうです。これは、学

生から聞いた話ですけれども、映画館で映画を見るだけではなくて、若い方たちが自分で簡単に映画の製作ができる時代だということです。そういう自分たちでつくった映画を上映する自主的な上映施設が、商業映画館ではなかなかないということなので、自治体と行政で、そういう文化的な映画をはじめとした上映館が用意されれば、わざわざ京都・大阪に出かけなくてよいと思いますし、また、その施設を中心として、様々な催しやイベントが生まれてくるのではないかなと思います。本当にこれからの若者を中心としたまちづくりでは欠かせない問題だと思います。

市長、その辺よろしく願いいたします。



枚方市長(中司宏)

先ほど、淀川の舟運や宿場町の話もしましたが、特に江戸時代、この枚方の地域はかなりにぎわっていたと思うんです。ですから、そういうにぎわいとか、もてなしとか、そういう文化をもう一度、今の時代に再現をしたいと考えています。

ですから、生涯学習都市あるいは学園都市構想を進めていく上で、にぎわいや楽しみ、親しみや遊び心など、そういう部分も非常に重要ではないかと思っています。

一つ提案なんですけれども、先ほど私、子供のころに大学を探検したという話をしましたが、子供たちが大学に親しむということも非常に大事だと思います。そこで、大学と地域の連携を深める一つの方策として、各大学の学生さんたちが案内役を務められて、小学生を対象に大学探検隊をつくり、大学はすごいな、大学はおもしろいな、という気持ちを子供たちの心に芽生えさせることも非常に大事だと思いますので、そういうことができれば、よろしく

お願いしたいと思います。

コーディネーター(田中久和氏)

ありがとうございました。

本来でしたら、聴衆の皆様から、私たちがここで話したことについて、ご意見や感想をいただき、そこでまた私たちがお答えするという意見交換があれば一番良いと思うのですが、時間的なこともありまますので、今話していただいたことにつきまして何か、ご提言とかありましたら、また機会をとらえて、寄せていただきたいと思います。

今日は長時間ご清聴いただきましてありがとうございました。

時間が来ましたので、これで終わりとさせていただきます。

どうもありがとうございました。

司会(南)

どうも、ありがとうございました。

皆様のご意見、とても参考になりました。

それでは、もう一度、コーディネーターとパネリストの皆様、盛大な拍手をお願いいたします。

5 . 閉会

司会(南)

ありがとうございました。

おかげさまで、本日予定いたしておりました「学園都市ひらかたフォーラム」のすべての事業を終了いたしました。

つたない司会進行で、皆様にご心労をおかけしてまいりましたが、何とか務めさせていただくことができました。皆様のご協力、心より厚くお礼申し上げます。

これにて、学園都市ひらかた推進協議会設立5周年記念事業「学園都市ひらかたフォーラム」を終了いたします。

皆様、長い時間、どうもありがとうございました。

お帰りに際しましては、お気をつけてお帰りくだ

さいませ。

本日は、ご来場ありがとうございました。

